大根が千両役者に

クリスマス・ビンゴ大会

信じられない出来事は昨年のクリスマス・ビンゴ大会で起きた。

イエス・キリストの生誕を祝うのがクリスマスだが、最近は信仰に関係なく誰もがクリスマスを祝う。「教会でもクリスマスを祝うのですか」と言われると返答に困惑するが、本当の意味を知らなくても誰もがクリスマスを祝うのはキリスト者としてうれしいことだ。

特に十二月二十四日のクリスマス・イブのミサにクリスチャンでなくても教会を訪れる人がかなりあり、その人たちの歓迎を含めてミサのあとパーティーを催す教会が多い。

私が所属する下松カトリック教会は小さな教会だが、神父が園長の幼稚園児の家族やフィリピンから研修生として働きに来ている青年たちも集まり、小さな聖堂はいっぱいになった。

大根を選んだ子ども

ミサのあとのクリスマス・パーティーではケーキや軽食を食べたあと、音楽演奏などとともにビンゴゲームを楽しんだ。

ビンゴは最近ではいろいろなイベントでもよくされるのでご存知と思うが、プレゼントが当たるので会場は盛り上がる。全員にビンゴカードを配るので会場に一体感ができる。

その夜の賞品は信徒が持ち寄ったが、司会者も会場を盛り上げようと賞品を用意する。私は大根を用意した。

最初にビンゴになったのはフィリピンの青年で、うれしそうに振り子つきの置き時計を選んだ。

次にビンゴになったのは小学校低学年の男の子。彼はサンタのブーツに入った菓子詰め合わせや図書カードなどには見向きもせず、大根を選んだのだ。

「ボク、ここにお菓子の詰め合わせがあるよ」と言ったが、首を横に振り、大根を持って行った。

会場は大笑い。なぜ大根を選んだのか聞けなかったが、多分、お母さんのためだろう。得意そうに大根を担ぐ姿で会場の雰囲気は一気に盛り上がった。

ビンゴ大会の目的は和やかな雰囲気づくりである。しかし、ややもすれば高価な賞品に目が集中しすぎる。それをやわらげるために意外性とユーモアで大根を用意したのだが、子どもは期待以上に大根を千両役者にしてくれた。

さらに自分のためではなく、他者のためにという"選び"がクリスマスにふさわしく、心を温かくしてくれた。

巡礼とは聖なる地を旅することだけではない。日々の生活もまた巡礼であり、子どもが大根を選んでくれたことに聖なるものを見つけさせられた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

雰囲気を盛り上げた演奏会